

令和3年度第4回経営協議会議事要録

日 時 令和3年10月29日（金） 14時00分

場 所 KKRホテル名古屋 福寿の間

出 席 学内委員6名（欠席なし），学外委員6名（欠席1名） / 会議成立

開会 13時59分

開会にあたり、議長（学長）からあいさつがあった後、本日出席の委員数が確認され、会議成立が宣言された。次いで、総務課長から、本日の配付資料の確認及び会議日程等の説明があった。

前々回及び前回議事要録の確認

議事に先立ち、前々回会議（令和3年度第2回）及び前回会議（令和3年度第3回）の議事要録を確認した。

議題

1. 令和3年度人事院勧告等への対応について

議長から提議され、新津委員（総務・財務）から、標記について、本学における賞与分及び月例給の対応方針、実施時期、人件費影響額見込み等について資料に基づき説明があった。併せて、これに伴い学内関係規程等の改正を行っていくことについて、対応方針に変更がない限り、改正にかかる所要の措置については経営協議会の審議を経ずに役員会に一任することが確認され、次いで以下のとおり質疑応答が行われ、これを承認した。

○学外委員からの質疑 ●大学側の回答

- 大学の経費は国からの運営費交付金で大半が占められていることから、人事院勧告を尊重して対応されていると思うが、今回の対応で半分財源が浮き、その財源の使い道として運営費のほうでなんとか執行することになっているが、もともと人件費で予定していたものをカットした分は例えば頑張った人にはそれだけインセンティブとして与えるなどの考えはあるのか。
- 今のところ、減額分については次の議題である補正予算の中で説明するが、その使い道として特別なインセンティブを追加で考えようということは検討していない。施設の改修費など追加に必要な予算があるので、全体の予算の中で執行する予定である。
- そういう使い道であると、次年度にその分、国からの予算が差し引かれるということはないのか。
- 人事院勧告の対応は各大学が苦勞しているところである。今回は下がった分、予算が使えるわけだが、逆に上がった分も全て運営費交付金の中でやりくりをして対応してきたこ

ともあるので、下がった時と上がった時の対応についてはその時の全体の予算で考えることになるのでご理解いただきたい。

2. 令和3年度国立大学法人愛知教育大学補正予算について

議長から提議され、新津委員（総務・財務担当理事）から、今回、一般会計で予算を補正することについて、収入予算については、コロナウイルス感染症の影響を受け「学生への相談体制の強化」のため追加措置したこと、また、「免許状更新講習」「公開講座」等の中止により収入見込減額分として計上したこと等、支出予算については令和2年度の余剰金が目的積立金に承認されたことを受け、附属幼稚園の改修を始めとする教育研究環境の整備の改善のために充てること及び、人事院勧告対応を含む人件費の減額により運営費に充てること等に関し、資料に基づき説明があり、原案どおりこれを承認した。

報告

1. 教員養成フラッグシップ大学への申請について

学長から、冒頭に今回の申請にかかる背景の説明があった後、教員養成フラッグシップ大学に求められる役割、制度上の特例など制度に関する概要について資料に基づき説明があり、11月12日までに文部科学省に申請する旨報告があった。続いて、本学のフラッグシップ構想の全体像案及び本学が構想する教育学部教育課程における先導的科目の位置付けを示したICT活用指導力の育成を見通したカリキュラムマップについて資料に基づき説明があった。学長から11月に申請後、次の経営協議会で改めて報告する旨説明があった後、以下のとおり質疑応答が行われた。

- これは教員養成系大学のフラッグシップなのか、教員養成学部も含むような全体的な国立大学のフラッグシップなのか、どちらを目指しているのか。
- 教員養成学部も含むものであり、教員養成系大学以外の大学も申請可能である。既に、いくつかの教員養成学部を持っている大学が申請予定であると聞いている。
- 説明を聞き、教育系の学部あるいは教員養成系の教育システム全体の改革に繋がるようなイメージを持った。その中で教員養成系大学の役割を明確にしていくためには、是非愛知教育大学にフラッグシップ大学になっていただきたいと思うが、一方で目的がよくわからない部分もある。そもそも申請するための条件はあるのか。また、例えば、卒業生の中で教員になった者の割合など、業績に関する制約等はないのか。
- 附属学校を置いている、教職大学院を置いているなどいくつか条件はあったが、本学は申請するための全ての条件を満たしている。なお、業績に関する制約等はない。
- 愛知教育大学が申請する際、なにかポイントとなる点はないかを考えていたが、Society5.0の実現は、中部経済圏の活性化に繋げることが必須であるので、全体像の中でこれに繋げる多様な人材育成をアピールポイントにしてはどうかと思った。特にICTと多様性である。外国人労働者が増えていく中で、多様な子どもたちをどう育てていくかという点がポイントになると思う。多様性は中部経済圏が抱えている大きな問題でもあり、人材育成として大きな要件を持っていると思うので、そのあたりを参考にされたらどうかと思った。
- 外国人児童生徒支援については、現在でも必修科目としており、地域連携でも進めてい

て、既にポイントとして入れてある。

- 多様性に関しては、地域共同教育活動という名称の科目を設定し、学校体験も含めながら包括的に進めることで申請したいと思っている。Society5.0に関しては申請書に書き加えるつもりである。先ほど「中部経済圏」というキーワードをおっしゃっていただいたので、中部地区から申請するポイントとして、是非申請書に書き加えたい。
- 愛知教育大学の1つの特色として、この辺りは産業が多いので、産業界をうまく使って行っていくという点に関し、産業界で今課題となっているのは、1つは国際競争力である。国際競争力を高めるための人材、国際的に勝負できる人材を育てたいというのが一番にある。そのためには、多様性を心から理解できて、多様性を受け入れられる、そういった教育をおこなうような項目を是非入れていただきたいと思っている。目指すところは、将来教育を受けた人材が国際的に渡り歩けるようになる、そのための改革がかなり必要だと思いい、その改革に繋がるような形でフラッグシップ大学制度をうまく使いながら「未来共創プラン」を実現していただきたいと思っている。
- 多様性を身に付けた子どもたちが育てられるような教員を輩出する役割は必要であると思っている。また、企業との連携については「未来共創プラン」でも進めていきたい。

2. 令和2事業年度財務諸表の承認について

新津委員（総務・財務担当理事）から、資料に基づき、令和2事業年度財務諸表の承認について令和3年8月31日付けで文部科学大臣から通知があった旨報告があった。

3. 令和2事業年度財務レポート及び財務リーフレットについて

新津委員（総務・財務担当理事）から、標記レポート及びリーフレットの発行について、資料により概要の説明があり、今回から写真を多く取り入れ、分かりやすさ見やすさを心掛けたとの報告があった。次いで以下のとおり質疑応答が行われた。

- 誰に対してレポートを発行するかによって内容は大きく変わると思うが、学生がどう育ってどう活躍しているか、教員がどういう研究をしているかなど大きなインパクトのあるページを作っていたらどうかと感じた。
- 来年度は、大学としての活動、附属学校としての活動及び学生の成果をより多く載せてきたいと考えている。

4. 令和4年度概算要求について

新津委員（総務・財務担当理事）から、文部科学省から財務省へ要求された本学の概算要求について、資料により報告があった。

5. その他

(1) 学長の愛知県内全54市町村教育委員会訪問での意見交流について

議長から、「愛知県内全54市町村教育委員会訪問での意見交流」をテーマとして、意見交換を行いたい旨提案があった。続いて、令和2年11月から令和3年8月までの10か月にわたり、名古屋市を除く県内53市町村の教育長、愛知県教育委員会及び名古屋市教育委員会の幹部、愛知県総合教育センター所長、名古屋市教育センター所長の合計57箇所へ担

当学長補佐等と訪問し、未来共創プランの説明及びプランに対する協力依頼を行ったこと、その中で意見交流した本学への期待及び共有した課題等の内容について、資料に基づき説明があった後、以下のとおり意見交換が行われた。

- このような訪問での意見交流の取組はこれでいったん終了なのか。
- 本学は、広域拠点型教員養成大学であるので、今後、岐阜県、三重県の教育委員会教育長を訪問し、その後岐阜県三重県の主要都市の教育委員会には訪問したいと思っている。
- 先ほどおっしゃられたが、愛知県下の教育長はほとんどの方が小中学校の校長経験者で、愛知教育大学を卒業した方なので、外から見ると同じところで育った方が同じところで同じ意見交換をしているなという感じを受けていた。豊根村の話が出ていたが、豊根村の教育長は行政職出身なので連携に関しては厳しい意見が出たと思う。小牧市長は地域にとっての課題を直接伝えたと思うので、できれば全部は無理かと思うが、各市町村は教育委員会があるが、教育委員は経済界の方、学識者、教員ではない保護者などいろいろな分野の方がみえるので、外の方の意見をもう少しエリアを広げて聞いて回っていただくと教員経験者以外の意見が聞けるのではないかと感じた。
- 最後のほうに訪問した豊山町教育長は、元愛知県教育委員会教職員課長を務められた方で、以前から本学に対して厳しい意見をくださっていたと聞いていたが、訪問時は90分意見交換を行い、違った視点でご意見くださり大変勉強になった。
- 教育委員会は大学と連携協定を締結したが、実行に移すことがなかったとの話があったが、学長の訪問によって実効性を持つものになってきたのではと感じた。どういう学生を教育現場に送り出すかということは、やはり現場がどうなっているかを大学が把握した上で教育をしていく必要があると思うが、現場の変化があまりにも急だったりして、大学として情報を共有されていないところもあると感じた面もあり、是非このような訪問等を行うことで良い関係性を持てると思ったので推進していただきたいと思う。また、共有した課題や期待のところで、特別な支援を必要とする児童生徒への対応について、現代的教育課題を全学履修にされたことは承知しているが、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーについては、卒業後に正職員として働き口がないという現状もあるので、逆に大学から行政に対して予算を付けるように働きかけを行う取組もすることができないのかと感じた。愛知教育大学に入学してくる学生は、やはり子どものために何かしたいという思いをもっている人が多いと思うので、少しでもその思いを抱いたまま、社会に貢献したいという気持ちを大事にしたまま教育現場で働けるような環境を教育委員会等との連携によって整えていただければと思う。
- 特にスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの件については、かなり多くの市町で数も増えてきたと思う。常勤化した市町もちらほら出てきたので、常勤化していないところは是非お願いしますと訪問時に依頼してきた。
- 今年、自身が名古屋市教育委員会で教員採用にかかわっていたこともあり、愛知教育大学で学生に対し、採用面接のトレーニングを行った。担当した学生の中に、ルーツが日本ではない学生がおり、名古屋市の教員採用試験を受験した。先ほど多様性の話が出たが、名古屋市教育委員会でいつも求められたのは、「教員の多様性」で、障害のある方やルーツが日本でない方に教員になっていただきたいということがあると思う。障害については、

なかなか学校現場で全てが把握できない問題だと思うが、そういった学生さんたちも教育現場にどんどん出て、夢をもって教員になっていただきたい。多様な人間を教育現場に送り出すという形が望ましいのではないかと思う。

- ルーツが日本ではない学生をよく知っており、この学生は他の学生に対し良い影響を与えてくれ、名古屋市の教員採用試験に合格したと聞いている。是非次に続いて欲しいと思っている。障害を持った学生についても是非道を聞いていきたい。
- 愛知県内54市町村全てを訪問したことは素晴らしいことだと思う。未来共創プランで掲げている、「子どもの声が聞こえるキャンパス」は教育の未来を創るための実証試験の場となると思っている。その中で教育の未来はいろいろな要素があると思う。その要素をキャンパスの中、現場で創っていく、その上において、とにかく教育委員会を訪問されたような行動をしないと課題がわからない、行動をすれば必ず課題がわかるので、そこで得た本当の課題とその課題を解く鍵は間違いなく現場にあると思う。できればコロナ禍が明けたら、これはという海外の教育機関をピックアップし、同じような意見交換を行えればもっと素晴らしいのではないかと思う。
- 10月上旬の緊急事態宣言明けに、名古屋の中国総領事館から担当者が大学に来た。中国との研究交流や学生の交流の話が中心だったが、教育領事もみえ、中国の教育事情や今後どういう方向で交流していくかなど意見交換したところである。昨日は東アジア教員養成国際シンポジウムがオンラインで開催され、中国・韓国・日本・モンゴルから各々の国の学長や理事が参加した。今回のテーマは「ICT」で、日本を代表して本学の理事が「Society5.0時代に向けた日本の教員養成改革」という演題で講演を行った。その中で中国・韓国の話を聞いて思ったのは、中国はAI化等が進み、教員養成の改革を行うことによって教員が必要なくなるのではないかという話をしていた。中国も韓国も競争社会というイメージでどんどんエリートを養成していこうという雰囲気を感じた。日本はAI等を導入しつつ、教員の魅力は大学としては当然伝えていくべきであると感じた。
- 今回の訪問で得られたものは非常に大きいのではないかと思う。教育というのはローカルな背景や社会性などによって、抱えている問題は少しずつ違うのではないかという印象を持っている。国の状況によっても教育のやり方や中身が変わってくる。共通的なものは何かを探してみるとなかなか難しい。しかし、少なくとも愛知県の中で共通化した課題を愛知教育大学がリーダーシップをとって進んでいくという、そのきっかけになるような課題発掘をされたのではないかと思う。フラッグシップの中にどんどん生かしながら行っていくのがよいと思う。また、アジアの中で日本の位置付けは大きく、そういう意味で日本の教育は評価が非常に高いので、それを愛知教育大学が全面的に外に打ち出していくことがこれからのフラッグシップの役割なのではと思った。
- 学長がいろいろなところを訪問し、訪問先の共通項として愛知教育大学に求められているものは何であったかがわかればご教示いただきたい。
- 訪問先の教育長の4分の3の方は本学の卒業生であったので、本学の学生を是非多く教員にして欲しいと言われるのは当然であった。これは、卒業生でない教育長にも言われたことである。やはりリーダーになってくれるのは愛知教育大学の卒業生であるとも言われた。その時に様々な資質・能力が必要であると言われたが、全てが揃った学生を送り出すのは無理だと思う。それこそ、得意分野プラスアルファを持った学生を是非送り出していきたい。そうすることによって、その子たちが繋がる力も必要であると考えます。100

点満点の学生を送り出すのは難しいが、どこか秀でた学生を送り出したいと思っている。その子たちがその地域で繋がれる力も是非持って送り出したい。繋がれる力を持っていれば、他大学の卒業生の先生とも繋がることができ、その地域の教育に貢献できるのではと一番強く感じた。

(2) 次回(令和3年度第5回)開催日程について

議長から、次回会議は12月10日(金)14:00から開催する予定である旨説明があった。また、意見交換のテーマについては、「教員のICT活用指導力」に関する内容で行う旨説明があった。

閉会 15時57分